

9. 新生児心臓大血管手術症例の遠隔成績

高梨吉則*, 石原和明*, 今井康晴*

新生児心臓大血管手術成績は、症例数の増加とともに向上しつつある。1979年から1983年12月までの5年間では、47例の手術が施行され、手術死亡は15例、31.9%である。手術生存例の増加は、それらの遠隔期の状況の評価、検討を明らかにする必要性を増している。しかし、この点についての詳細な報告は少ない。今回、われわれの施設で1972年1月から1984年12月までに施行した新生児手術77例のうち、手術生存例38例の遠隔期の状態を検討したので、報告する。

1. 対象および方法

1972年1月から1984年12月までの新生児心臓大血管手術は77例で、生存例は38例である。ここではこれらの生存例38例を対象とした。性別は男児24例、女児14例である。手術時の平均日齢は15.3±7.1日、平均体重は3,020.4±683.9グラムである。今回の追跡期間は平均3.1±2.7年である(表1)。

対象38例を、新生児期に根治手術を施行した一期的根治手術症例13例、新生児期に二期的根治手術の一次手術を施行し、二次手術である根治手術の終了している二期的根治手術症例14例、新生児期に姑息手術が施行され、根治手術が施行されていない未根治手術症例11例に分けて検討した(表2)。

II. 結 果

一期的根治手術症例は総肺静脈還流異常症7例、その他6例である。その他の症例は、単純大動脈縮窄症2例で、追跡期間は3.5年である。未熟児PDAは3例で、追跡期間は3年、PDAは1例で

追跡期間は6カ月である。これらの6例は現在投薬もなく、良好な状態である。

総肺静脈還流異常症は心臓上部還流型2例、心

表1 新生児心臓大血管手術の遠隔成績 (1972~1984)

手術数	77例
(生存例)	38例)
(病院死)	39例)
対象	38例
性別	男24例 女14例
年齢	15.3±7.1日
体重	3020.4±683.9 グラム
追跡期間	3.1±2.7年

表2 新生児心臓大血管手術の遠隔成績 (1972~1984)

1. 一期的根治手術症例 (13例)	
1) TAPVC	7例
2) PDA	4例
3) simple Co/A	2例
2. 二期的根治手術症例 (14例)	
1) Co/A complex	6例
2) IAA complex	3例
3) TGA	3例
4) PPA	2例
3. 未根治手術症例 (11例)	
1) PPA	3例
2) PPS	2例
3) TOF	2例
4) IAA	1例
5) TGA \bar{c} PA	1例
6) SV \bar{c} PA	1例
7) TA(lc)	1例

* 東京女子医科大学附属心臓血圧研究所
循環器小児外科

臍部還流型1例，心臓下部還流型2例，混合型1例である。追跡期間は2カ月から8年で，3カ月と2カ月の遠隔期の死亡がある。心臓下部還流型の1例は易感染性があり，投薬を必要としている。残り4例は順調な経過を辿っている。

二期の根治手術症例は14例で，疾患は完全大血管転位症3例，純型肺動脈閉鎖症2例，大動脈縮窄複合6例，大動脈弓離断症3例である。

完全大血管転位症はⅡ型2例，Ⅰ型1例で，一次手術はいずれもPDA結紮術で，3年後にマスタード手術，1年後にセニング手術，ジャテン手術が施行されている。追跡期間は11年，3年，3年となっている。経過は良好である。

純型肺動脈閉鎖症は2例で，一次手術後4年で，心房中隔欠損を閉鎖し，右室流出路形成を施行した症例は現在術後13年で，心胸郭比54%と良好である。一次手術後2年で，右室流出路形成だけで終わった症例は，脳障害を残し，術後3年でリハビ

リテーション中である。投薬も強心剤，利尿剤を必要としている。

大動脈縮窄複合は6例で，5例は1～3年後に心室中隔欠損閉鎖が二次根治手術として施行され，うち3例で肺動脈絞扼解除後に右室流出路再建術が施行されている。残りの1例は両大血管右室起始症で，一次手術後3年で，心内修復術が施行されているが，敗血症で手術死亡している。

大動脈弓離断症は3例で，一次手術後5月から2年で，いずれも心室中隔欠損閉鎖術を施行している。現在，心胸郭比は54，57，60.5%で，経過は良好である。心胸郭比60.5%の症例は強心剤および利尿剤を必要としている。

未根治手術症例11例のうち，4例は姑息手術が追加された症例で，残り7例は新生児期の姑息手術だけである。

姑息手術の追加された4例に遠隔死亡はなく，2例の純型肺動脈閉鎖症では5年を経過し，心内

表3 未根治手術症例

(姑息手術が追加された症例)

診 断	姑息手術 までの期間	姑息手術	追跡 期間	CTR	EKG	肝腫	投薬	合併症	現在の状況 今後の方針
PPA	1カ月	valvotomy PDA絞扼術	5年	64%	RSR	1cm	(-)	(-)	PA index 432 心内修復術
PPA	3カ月	Brock手術	5年	62%	RSR IRBBB	(-)	(-)	MAT(+)	良 好 心内修復術
TOF&PA	3年	右室流出路形成	4年	69%	RSR	(-)	ジギリス 利尿剤	(-)	PO ₂ 51 mmHg 未 定
TA(Ic)	2カ月	ASD作製 再PAB	2年	70%	RSR	(-)	ジギリス 利尿剤	(-)	喘 嗽 未 定

表4 未根治手術症例

(姑息手術が追加されない症例)

診 断	追跡期間	CTR	EKG	肝腫	投薬	合併症	現在の状況 今後の方針	
SV&PA	4年	/						遠隔死
TGA&PA	3年	/	RSR	(-)	(-)	(-)	チアノーゼ 短縮手術	
IAA&VSD	2年	52%	RSR	(-)	(-)	(-)	良 好 心内修復	
TOF	2年	56%	RSR	(-)	(-)	(-)	PA index 200 心内修復	
PPA	2年	56%	RSR IRBBB	(-)	(-)	(-)	良 好 未 定	
PPS	1年	/	/	(-)	(-)	(-)	良 好 未 定	
PPS	1年	54%	RSR	1.5f.b.	(-)	(-)	良 好 未 定	

修復術を予定している(表3)。

姑息手術の追加されていない7例は、4年後に遠隔死亡を1例認める。残り6例は1～3年で経過良好で、このうち2例で心内修復術を、1例で姑息手術を予定している(表4)。

Ⅲ. 考 察

今回対象となった症例は、一次的根治手術症例では、総肺静脈還流異常症、動脈管開存症が多く、二期的根治手術症例では大動脈縮窄複合、大動脈弓離断症のグループが多い。

純型肺動脈閉鎖あるいは狭窄症も7例と多く、二期的根治手術を経て、良好な状態の症例も増加しつつある。

しかし、7例と比較的多い手術生存例を示す総肺静脈還流異常症に遠隔死亡が2例存在し、いまだ問題を残す疾患と考えられる。われわれの施設では、大動脈縮窄複合、大動脈離断症では、二期的根治手術の方針で、生存例の増加をみている。

今回の検討では、手術成績がいまだ不満足な新生児期手術の遠隔状態としては、比較的良好な結果と考えている。

Ⅳ. 結 論

1972年から1984年までの、新生児手術生存例38例の遠隔状況を検討した。対象は、一次的根治手術症例13例、二期的根治手術症例14例、未根治手術症例11例に分けられた。疾患としては、総肺静脈還流異常症、大動脈縮窄複合および弓離断症、純型肺動脈閉鎖あるいは狭窄症などが多く生存している。

遠隔死亡は総肺静脈還流異常症で3カ月と2カ月の2例、大動脈縮窄に兩大血管右室起始症を合併した症例は3年後の心内修復術による手術死亡、単心室に肺動脈閉鎖を合併した症例は4年後に、それぞれ1例ずつ認められた。いまだ不満足な手術成績を示す新生児心臓大血管手術の生存例の遠隔は、比較的良好と考えられた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



新生児心臓大血管手術成績は、症例数の増加とともに向上しつつある。1979年から1983年12月までの5年間では、47例の手術が施行され、手術死亡は15例、31.9%である。手術生存例の増加は、それらの遠隔期の状況の評価、検討を明らかにする必要性を増している。しかし、この点についての詳細な報告は少ない。今回、われわれの施設で1972年1月から1984年12月までに施行した新生児手術77例のうち、手術生存例38例の遠隔期の状態を検討したので、報告する。